

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

人は皆仲良くできる。あのオリンピックが何よりも見事に物語っている。

万物の霊長である人間にできないことはない。

特技に助けられて

長野県 牛山 良太郎

大正五(一九一六)年九月一日、長野県上伊那郡伊那町小沢区に生まれる。

昭和五(一九三〇)年三月、伊那町立伊那小学校高等科卒業。

同年四月、御子柴建築所に大工見習として入社。

昭和十年、見習期間終了。

同年、徴兵検査の結果丙種となる。以降自営にて建築業に従事。

昭和十五年、戸田建設に就職、満州奉天(瀋陽)勤務となる。

昭和十八年三月、帰郷中に会社より現地召集の通知がある。期日に間に合わないため、松本五十連隊の証明を持って二十日余り遅れ平陽の部隊に入隊する。

平陽の部隊にて六カ月の教育を受ける。教育終了と同時に黒河の部隊に転属となり、国境警備の任につく。

昭和二十年八月ソ連参戦、奉天に転戦となり終戦。

奉天において現地召集者は職場に帰るよう伝達があり、会社に行く。すぐに軍人は全員集合の命令。北陵に集合、ソ連軍監視の下で武装解除を受ける。その後でソ連軍の命令で勤務隊という作業班が組織される。仕事は、貨車の内部を改造し、木材で二階を造り板を張って日本兵輸送用の列車造り。時には資材食糧等の貨車の積込み等。

時には開拓団の方々であろうか、一般邦人の乗って行く列車もあった。十二月になり日本兵の輸送もほぼ終わったと思われる頃、我々も列車に乗り北陵を出発。いよいよ帰国できると思っていたが、満州里を過ぎ列車は西へ西へと進む。帰国の夢ははかなくも消え

去る。

数日走ってバイカル湖を過ぎ、イルクーツクに程近いアンガラ河畔の小さな駅に着き、ここで下車する。

ホタルビーハという農村の近くの幕舎の収容所に千人位が収容される。一基の幕舎に一個小隊、約百人が入る。

作業については、木材の伐採、運搬、貨車積み等。作業には作業毎にノルマが課せられる。伐採は二人引きの大きな鋸と斧で八人組になり、所定量になるまで切る。運搬、貨車積みにおいても同じである、貨物積みは夜中になることもある。腹が減っては戦はできぬと言うけれど、小さな黒パンか、少しばかりの雑穀の粥。朝出る二食分は一度に食べても足りない。昼は空の飯盒を持って作業に行き、水筒の水で我慢するよりない。空腹に加えて零下四〇度に達する寒さ、体は弱り切ってノルマどころではない。このため栄養失調で祖国日本に帰る夢もはかなく断たれ、厳寒のシベリアの地に倒れていく者が続出。こんな折、建築の技術者を探していると聞き、早速申し出て建築の作業に回

る。建築の仕事については自信があった。

仕事の正確さ、速さに彼らは驚くばかり。待遇も変わった。特技は身を助けると言うが、ここで自分の技術が役に立つとは意外であった。

四回目の冬が近づく頃、待ちに待った帰国の知らせが入る。列車に乗り収容所を離れる。東へ向かい数日間、待望のナホトカに着く。

すぐに船に乗ると思ったところ、アクチーブと呼ばれる連中が来て民主教育が足りないと言われ、四日間徹底的にしごかれてようやく乗船許可が出る。

ナホトカを出て翌日舞鶴港に入港、昭和二十三年も暮に近い頃懐かしの我が家に帰ることができた。

昭和二十四年に牛山製材建築所を設立、現在に至る。